

テーマトーク「子どもたちにサケを ― なにをどう伝えるか」

コーディネーター 河村 博 氏（北海道総合研究機構）

話題提供 浦野明央 氏（北海道大学名誉教授）

スピーカー 岡本康寿 氏（札幌市豊平川さけ科学館）

千葉養子 氏（とかち・帯広サケの会）

橋詰郁郎 氏（大雪と石狩の自然を守る会）

山田さなえ 氏（旭川いずみこども園）

山田直佳 氏（日本釣振興会道北支部）

話題提供 浦野明央 氏

1) 東大・海洋アライアンス・海洋教育促進研究センターによるリテラシー調査の結果
～サケの一生への理解について、4 択問題を課した場合小中では 25～30%程度しか理解していない。（小学生：27.8%・中学生：33.2%）

2) 現行の小中高の教科書に於ける鮭の取り扱い状況

小5：動物の発生及び成長・中2：生物の分類・中3：食物連鎖・高：恒常性—浸透圧調整／生態系のバランスと保全

サケのライフサイクルについて中学では習わない

3) 新・指導要領下でサケをどのように取り扱えるか

主体的・対話的で深い学び“active learning”

小学校～観察・実験、予想・仮説からの発想

浦野：系統進化を前提で教えなければならないか

中学校～食物連鎖 ＊主体的・能動的に学習 発見学習・体験学習・討論…

浦野：“active learning”は過去全て失敗して来た

4) 森・里・川・海にふれている第3期海洋基本計画を、どのように追い風にするか

「ニッポン学びの海プラットフォーム」下での取り組み→パイオニアスクールプログラム
道内の事例

① 羅臼：羅臼幼稚園～昆布を通して羅臼の価値を学ぶ

② 札幌：東白石小学校～サケ学習を通して学ぶ「命」「自然」「未来」

・山田直佳 氏：石狩川フェスティバル「水祭」会場（北旭川大橋）での子供向け釣体験。釣りから環境問題を考える。釣れる川は「（川環境が）良い川」と言える。元々釣人は川の環境に詳しい。子供たちに釣りや環境に興味を持ってもらいたい。また個人的に、サケ類（サケ・サクラマス・イトウなど）の継続的な成長観察などにも取り組んでいる。

・山田さなえ 氏：発表者の保育園では、今年初めて卵の提供を受けサケの飼育に取り組む。サケの飼育から環境教育への出発点としたかった。幼児に四季を感じさせる教育をしたい。1月に卵が孵化→臍嚢に興味→絵本「ピリカ、おかあさんへの旅」の朗読→4月放流式

・橋詰郁郎 氏：サケゼミナールの取り組み。これはサケの卵を貰い受けて、各種教育施設など団体や個人に卵を提供し飼育・放流する事業である。2 度の学習講座を開き、放流事業を続ける。アイヌ協会の協力で秋にはカムイチェプノミを共催。本会は長い活動の歴史がある。本質的に子どもたちへの、生物への関心喚起活動だと考える。

・千葉養子 氏：帯広第 8 中学校自然観察少年団とさけの会との共催で、放流事業を行っている。また親だけの食育事業などにも取り組む。(ハンドブックの作成)。放流式は 5 月 5 日。サケと人間の関わりは一種の生涯学習である。子供たちに体験させること、いたわる感情を育てることが大切。

・岡本康寿 氏：20 万匹の稚魚放流。2004 年自然産卵の割合を調査すると、豊平川では自然産卵によって回帰するサケが、全体の 7 割に及ぶ事が分かった。そこで、今まで通り体験放流事業は続けながら、今年から放流数の削減をする取り組みにかかる。今年は 8 万匹を放流した。サケの放流は、人々がサケに触れあう機会、親しむ機会ととらえて欠かせない部分である。同時に札幌ワイルドサーモンプロジェクト (SWSP) の活動を行っている。エコネットワークとの共催で、「さっぽろワイルドサーモンフットパス」開催。例年通りのサケフェスタや市民フォーラムなど、各イベントへの出展などをも試みる。

◎一般質問 1：かつては九州までサケ遡上があったが、今はどうか。

温暖化が大きな要素だが、かつて九州に来ていたサケは、偶々寒流が九州沿海にまで及んでいたのが、何らかの理由で流れが変わった。また特に東北地方では放流事業などの縮小で、策の回帰が減っている。自然環境の要素と資源保全の要素がある。

◎一般質問 2：放流事業の人的効果、すなわち子どもの時の体験が資源や環境を守る大人になっているか、お考えをお聞きたい。

帯広では成長してもサケ事業に参加する人物がいるし、札幌西岡公園などでの子供向けの観察会では、やはり成長しても来てくれる人物を数名見かける。

Key word としてのまとめ

親しむ・知る・守る・共生する

＝道内・東北では、サケに関して「知る」と言う段階での教育がすっぱり抜けている。「親しむ」から「知る」へ持つて行くには、身近過ぎて上手く教育が出来ていない。それを教育者に期待したいが、先生自体が知らない部分がある。大学における教員養成に期待したい。

＝水族館の協力：東京葛西臨海水族園では、「海の学び舎」という取り組みがある。中学生から大学生までの中等・高等教育の段階では、何故か生徒・学生は全く魚に興味を持たない。その状況を打破するための高位学校の生徒への「再教育」の場が、「海の学び舎」であった。